さがしもの

牧田深月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作うろ覚え＆途中までしか読んでいないので多少矛盾しているところもあるかもしれませんが許してください。

～あらすじ～

幼いころ家族と離れ離れになってしまった少女、椿。

ほとんど家族の記憶がない椿には、たった一人、どうしても忘れられない人がいた。

「兄を探してほしいのです」

椿は兄を探してほしい、と万事屋に依頼を持ちかける。もし兄が生きているなら、会って話したいと言う椿に、銀時はかつての友の面影を重ねて――？

目　次

忘れられない人 ―― 1
万事屋 ―― 3
依頼と過去 ―― 5

忘れられない人

私には兄がいた。
優しい兄だったと思う。
一回りも歳が離れていた妹に、意地悪をしたりだとか、殴ったりだとか、そういうことは一切しなかったから、多分優しい兄だったのだと思う。
兄について語るには、私はあまりにも兄のことを知らなかった。私はまだ小さかったし、ある時を境にほとんど家に寄り付かなくなった兄が、両親に疎まれている兄が、どんな人なのか、なぜ疎まれているのか、全くと言っていいほど知らなかったのだ。
ただ不器用な手つきで頭をなでてくれた、優しい手の感触は今でも忘れられない。
家を出たのは6歳のときで、私はまだ小さな子どもだった。悲鳴と金属音が響く中、乳母らしき女性に促されるまま、土壁の崩れているところから家の外に出た。
逃げろ、という声がした。私は一瞬振り向いて、それから転げるように駆け出した。逃げなきゃ。どこか遠くまで。
そんな義務感に突き動かされて、子どもの足でへとへとになるまで歩いた。
気づいたときには全く知らない場所にいて、振り返って来た道を戻ろうとしたけれど、夢中だったからどこをどう歩いてきたのか全くわからなかった。長いこと歩いた足はしくしくと痛んだし、耐えられないほどの空腹感は、まだ子どもだった私を追い詰めるには十分だった。
もうこれ以上一歩も歩けない、と道端にしゃがみ込むと、お腹がぐうぐうと鳴った。不安で仕方なくて、べそをかいていた私に救いの手を差し伸べてくれたのは、道向かいにあった茶屋を営む夫婦だった。
夫婦は親切にも私に食べるものを与え、汚れた体を拭いて、瓦版で迷子の知らせをしてくれた。

しかし、残念なことに、私の親だと名乗りを上げる人はいなかった。悲しくて少しだけ泣いた。両親が迎えに来てくれないことよりも、兄が探しに来てくれなかったことが悲しかった。私はどこかで、兄が迎えに来てくれることを期待していたのだと思う。

冷たい両親よりも、どこか温かみのある兄が、私は好きだった。兄にとって私が生きていようが死んでいようが関係ないような存在だったとしても、私は兄が好きだった。

それから私は茶屋「藤袴」の夫婦の養子となった。

夫婦は養子である私を、本当の子どものように可愛がり、ときには怒り、一緒に笑い合いながら、育ててくれた。二人には感謝してもしきれない。幸せを噛み締めながらも、兄のことを思い出すことが多々あった。兄は今どうしているだろう。どんなに幸せでも、私はどうしても兄のことが忘れられなかったのだ。

万事屋

私が十五になった年だった。
常連客でそれなりに歳の近いお妙ちゃんとはよくお喋りをする仲で、私にとってはお姉さん的な存在なのだが、私のこれまでの境遇を知った彼女はいやに熱心に、兄を探すように言った。
彼女自身、弟がいるからそう考えてしまうのだろうが、少なくとも兄がお妙ちゃんほど私の事を気にかけていたようには思わなかったし、ほとんど会う機会などなかったから、兄にしては、私が生きていようが死んでいようがさして問題ではないような気がするのだ。
私がいくらそう訴えたところで、お妙ちゃんが引くはずもなく、半ば強制的に万事屋なるものに連れて行かれた。
「ねえお妙ちゃん…万事屋って何？なんで私お妙ちゃんに引きずられてるの？」
「万事屋は新ちゃんの仕事場よ。名前の通りなんでもやるわ。どーせ暇してるだろうし、最近金欠で困ってるって聞いたからちょうどいいわ！」
いやいや。ちょうどよくない。要するに私は体のいいカモか。
「銀さーんー！」
ぴーんぽーん。
インターホンの音が間延びして響いた。返答はない。続けて、お妙ちゃんの細い指がもう一度インターホンを押した。
ぴーんぽーん。
これまた返答はない。
「留守みたいだね。仕方ないからまた出直そ…」
ガチャッ。
お妙ちゃんが扉に手を掛けて、昼間にも関わらず鍵がかかっていることを確認した瞬間、ドアを破壊した。迷いなく破壊した。
「どわぁぁぁぁぁぁ!!何すんだお前！」
「あら、銀さん、いたんですか？昼間から鍵がかかってるから、てっきりいないのかと」

吹き飛んだ扉の前で尻もちをついている銀髪の男性は、顔を青くして引きつった顔で愛想笑いを浮かべた。それに釣られるようにお妙ちゃんも笑った。

にっこり笑ってるけどお妙ちゃん…笑えない…笑えないよ…。

「せっかく依頼人を連れてきたのに、居留守ですか？」

「あぁ…月末だから、ババァが来たのかと思ってよ。わりーわりー」

「また家賃滞納してるんですか？まったくもう…」

呆れたように額に手を当てるお妙ちゃんを他所に、銀髪の男性は、何を考えているのかよくわからない顔で家の中を指差した。

「ま、とりあえず、上がれよ。依頼だろ？」

「はい」

促されるままに草履を脱いで、家に上がろうとしたとき、あ、そうだそうだ、と言って私を振り返った。

「俺、万事屋やってる坂田銀時。よろしくな」

「…よろしくお願いします」

いくらお妙ちゃんの知り合いで、お妙ちゃんが信頼している人だと言えど、家賃滞納した挙句、大家さんに居留守を使おうとした人って…どうなのだろう。

いまいち信用に値しない人だけど、この人に任せて本当に大丈夫なのだろうか。

依頼と過去

「で？依頼っつーのは何なんだ？」
新八が椿と銀時の前に薄いピンク色の液体の入ったグラスを置いた。椿はグラスを持ち上げ、口元まで持っていく。いちごの甘酸っぱい匂い。いちごミルクだった。なぜいちごミルクなのかはよくわからなかったが、気分を落ち着かせるために一口いちごミルクを口に含んだ。喉を滑り落ちていく冷たい液体が、次第にぬるくなっていくのを感じた。
「兄を探してほしいのです」
ぽつん、と零した言葉は切実にか細く宙に浮いた。
銀時は、死んだ魚のようだと評される目を僅かに細めた。椿が『藤袴』の養女であることは、かぶき町では周知の事実。その椿が、兄を探してほしいということは、その兄は血の繋がった兄だろうということは誰しもが想像できた。
「こんな美人な妹を放っておくなんて、ひでー兄貴だな」
「兄とはもう十年近く会っていません。生きているか死んでいるかもわかりません。それどころか、兄がどこの誰なのかもよくわからないのです」
「…そりゃあ、どういう意味だ？」
「私が幼い頃、家族と離れ離れになったからです。少し、長くなりますが…聞いていただけますか？」
椿は無意識に左手で右の手のひらを撫でた。
自分の過去を、こうして他人に語るのは初めてのことだった。

※

私が育ったのは、おそらく一般庶民のような家庭ではなかっただろう。子どもながらに、どこまでも続いているかのように長い廊下とがあったことや、掃除や洗濯、食事の膳を運ぶ多くの使用人がいたことを覚えていたからだ。

両親との関係は希薄だった。
私の世話をしてくれていたのは乳母のキヨで、キヨには一人娘のおみつがいた。私の遊び相手は専らおみつだった。おみつ以外に私と歳が近い子どもはいなかったからだろう。両親とのふれあいがなくとも、寂しさを感じることはなかった。物心ついたときから、それが当たり前だったから。
それでも、時々両親以外で部屋に遊びに来てくれる人がいた。それが兄だった。
兄は、私より一回りほど年上だった。
それだからか、泣かされたり、からかわれたりすることはなかった。ただ私が遊んでいる様子を少し離れたところからじっと見ていた。
雨の日、部屋にこもって暇を持て余していると、どこからともなく兄がやってきて、勉強を教えてくれた。
ぎこちなく筆を握る私の手に手を添えて、ひらがなを書いた。これが私の名前だと言ってくれた。じゃあにいさまの名前はと聞くと、違う紙に名前を書いてくれた。漢字だったから読めなかったが。
私は兄と勉強する時間が好きだった。
けれど、次第に成長していくにつれ、私は兄について様々なことを知ることになった。
例えば、両親に疎まれていること。例えば、兄がほとんど家にいないこと。
でもそんなことはどうでも良かった。
兄が、私を妹として見てくれているだけで十分だった。
「にいさま、どこへ行くの？」
兄は物々しい格好で、腰に刀を差していた。
今まで兄がそんな格好をしていたところを見たことがなかったので、私はびっくりして尋ねたのだった。
「志を果たしに…って言っても、お前にはまだわからねぇか」
兄はそう言って苦笑して、私の頭をくしゃりと撫でた。
相も変わらず優しい手だった。
「俺に何があっても、お前は生きると約束してくれるか？」

「うん！」
兄の、差し出された小指に自分の指を絡めて、私は兄と約束した。舌足らずに指切りげんまん、と歌う私に、兄はいつものように優しい笑みを浮かべていた。
それが、私が兄に会った最後だった。

※

「椿さま！」
「キヨ！ねえ、これなんの音？」
金属同士がぶつかり合うような音がした。
犬の唸り声のような音と、ヒューヒューと風がなる音。
キヨは私を落ち着かせるように背中を撫でると、おみつの服を取り出して、今着ている着物を脱いで、それに着替えるように言った。
「ね、なにがおきてるの？」
子どもながらに、何か異常なことが起きているのだというのはなんとなくわかっていた。
「お兄様とお約束なさったでしょう。そのために、ここからお逃げください。」
おみつが私の手を握った。いつの間にか、彼女は私の着物を着ていた。なぜなのか考える暇もなく、キヨは低い声で囁いた。
「屋敷の裏の、塀が崩れているところから外へ出て、できるだけ遠くへお逃げなさい。さあ、早く！」
言われるがまま、私たちは部屋の外へ飛び出した。
部屋を出た瞬間、先程からずっと聞こえていた音が悲鳴だと気づいて、背筋が寒くなった。それでも私が逃げ出さなかったのは、おみつが私の手を握っていたからだった。
雑草に隠れるように庭を横切った。ぼうぼうに伸びた草は、私たちをうまく隠してくれた。時折響く怒声や、追い詰められた動物が放つ最期の叫びに足が止まりそうになりながらも、私たちは走った。
やっと土壁の破れ目にたどり着いたとき、私たちはどちらも汗だく

になっていた。穴は小さく、子ども一人が通るのがやっとだった。おみつは私に、早く穴をくぐるように言った。言われたとおり、青臭い地面に這いつくばって、身体半分ほど向こう側に出たときだった。

「おい！餓鬼がいたぞ！」

思いの外近くで野太い男の声がして、続いて草をかき分ける音が聞こえた。まだおみつが潜っていないのに。私は必死になって穴を潜ろうとしたが、恐怖で手にうまく力が入らなかった。おみつの汗に濡れた手が私の足を押しているのを感じた。足音がどんどん近づいてくる。どうしよう、どうしよう…。

「あ」

小さな声がぽとりと地に落ちた。

おみつの声だった。まだおみつが押してくれていた足に、生温い水がかかったのを感じた。やったか、と声がした。穴から這い出ると、足にべっとりと赤いものがついていた。這い出てきた穴から、蛇のようにじわじわと浸食する赤い液体。それがおみつの血だと理解するのに、そう時間はかからなかった。

震える足を殴りつけて、なんとか立ち上がると、家とは反対方向に走った。逃げなければ、殺される。その思いが私を突き動かしていた。夕暮れで、あたりは真っ赤に染まっていた。

まるで、血のように。

※

「それから、何里歩いたかはよく覚えていません。もっとも、子どもの足ですからそう遠くは歩いていないのかもしれません。何しろ無我夢中でしたので…」

しばらく誰も話さなかった。

いや、話せなかったという方が正しいのかもしれない。思いもよらぬ壮絶な話に、皆、言葉が出なかったのだ。

椿はコップに残っていたいちごミルクを飲み干した。すっかりぬるくなってしまったそれは、あまり美味しくなかった。

「それで、万事屋さん。兄を探していただくことは可能ですか？」
「できる限りはやるが、保証はできねーぜ」
「それでも構いません。依頼料は前払いで。もし、兄が見つかれば、この倍額払います」
銀時は、差し出された封筒を受け取らなかった。
正直なところ、喉から手が出そうなくらい欲しかった。だが、依頼を叶える確証もないのに金を受け取るような真似はしたくなかった。
「金は、兄貴が見つかったらもらうわ」
椿はびっくりしたように目をぱちぱちと瞬かせた。お妙ちゃんは、万事屋を金欠だと言っていた。けれど、彼はお金を受け取ろうとしない。お金を受け取らないのも、彼らなりの流儀があってこそだろう。思っていたよりまともな人なのかもしれない。
椿は封筒を懐に戻すと、背筋を伸ばして深々と頭を下げた。
「どうかよろしくお願いいたします」

微笑んだ椿に、どこか懐かしさを感じて、銀時は首を傾げた。どこかで会ったことがあるような。誰かとよく似ているような。そんな気がしたけれど、さっぱり思い出せなかった。いくら頭をひねっても、どこからともなく湧いてきた既視感を消し去ることはできなかった。